公益財団法人日本陸上競技連盟
陸上競技研究紀要
第９巻, 160-162, 2013
Bulletin of Studies
in Athletics of JAAF
Vol.9,160-162,2013

2012 年ヨーロッパ陸上競技選手権大会
視察レポート

杉林　孝法
金沢星稜大学人間科学部

2012 年 6 月末，フィンランド・ヘルシンキにおいてヨーロッパ陸上競技選手権大会が開催され，全日程を視察した。その際の模様や感想をレポートする。

１．2012 年ヘルシンキ大会概要

期間：2012 年 6 月 27 日～ 2012 年 7 月 1 日
場所：ヘルシンキ・オリンピックスタジアム
参加国数，出場人数：52 か国，1342 人
開催年について：前回の 2010 年バルセロナ大会までは 4 年に一度の開催であったが，今回からは隔年開催となっている。なお，今後は 2014 年チューリヒ大会，2016 年アムステルダム大会が予定されている。

ヘルシンキ　オリンピック・スタジアム

２．大会結果について　－出控え組と活躍組，オリンピックではどうなる？－

この時期のヘルシンキは日が長く，多くの日が晴れたため競技にとって良いコンディションであった。しかし天候が変わりやすく，夕立に見舞われて気温が急激に落ちることもあった。選手も観客も雨具を常備していたことが印象的であった。

ラビレニ選手（フランス）の跳躍

今大会はオリンピックの 1 か月前の大会であったため，選手，国によって様々な位置づけで捉えられていたようであった。つまり，オリンピック前の重要試合として集中度を上げて挑むか，あるいは“出控え”か，である。特に開催国イギリスの有力選手の多くがオリンピック本番に向けて本大会を回避していた。表 1 は各国のメダル獲得数上位 10 各国をまとめたものである。出控えムードの中にあって，男子で特に目立った活躍をみせたのはドイツとフランスである。ドイツは走幅跳のバイエル選手(8.34m で優勝)，棒高跳のオットー選手（5.92m で 2 位)，砲丸投のストール選手（21.58m で優勝)，フランスは 100m のルメートル選手（10.09 秒で優勝)，棒高跳のラビレニ選手（5.97m で優勝）らのオリンピックでのメダル有力候補選手が素晴らしい仕上がりをみせていた。女子を見てみると，ウクライナが他を寄せ付けず計 14 個のメダルを獲得した。三段跳のサラドゥハ選手（14.98m で優勝）は今季世界最高記録であった。

一方，今大会はオリンピックのエントリー締め切り前であるため，代表選考会を兼ねている国もあった。例えばチェコの 10 種競技がそうである。チェ

表 1．各国のメダル獲得数

Rank	Nation	Men				Women				Total			
		Gold	Silver	Bronze	Total	Gold	Silver	Bronze	Total	Gold	Silver	Bronze	Total
1	Germany	4	3	2	9	2	3	2	7	6	6	4	16
2	Russia	2	2	2	6	3	2	4	9	5	4	6	15
3	France	3	3	4	10	2	1	1	4	5	4	5	14
4	Ukraine		2	1	3	4	5	5	14	4	7	6	17
5	Turkey	1	1	1	3	3	1		4	4	2	1	7
6	Great Britain & NI	3	1	1	5		2		2	3	3	1	7
7	Czech Republic	2			2	1	1	1	3	3	1	1	5
8	Netherlands	2	2		4		1		1	2	3	0	5
9	Norway	1		1	2		1	1	2	1	1	2	4
9	Spain		1	2	3	1			1	1	1	2	4

コ陸連関係者によると，8045 点で 6 位に食い込んだ 37 歳のロマン・シェブルレ選手が 4 度目のオリンピック代表に選ばれたそうである。

ところで，ヨーロッパ選手権が隔年開催になったことで，今後もオリンピックイヤーと必ず重なることになる（2016 年アムステルダム大会）。日程にもよるが，そこではまた今回のような出控えが起こると予想される。これは，ただでさえ大きなストレスがかかる競技会が続く現在の競技カレンダーでは避けられないことである。大会主催者としてはヨーロッパ最高峰としての格式と重みを維持したいところだと思うが，選手にとっては競技会の戦略的な選択が益々重要になってくるだろう。

レース後，選手に駆け寄るマスコットの Appy 君

３．表彰式について
－新たなスタイルとなるか？－

大会全般にわたって，盛り上げ方の工夫がなされていた。アナウンサーによる節度のある煽り，大会ハイライト映像のスクリーンでの放送，マスコットの着ぐるみ等，おなじみのものも十分活用されていたが，今大会で特筆すべきは表彰式であろう。

今大会は，5 日間という近年のヨーロッパ選手では最も短い期間で開催され，過密日程であった。そのためもあって，通常はスタジアム内で行われる表彰式が，今回はスタジアム外に設置されたイベントパークの一角で行われた。競技終了後の夜 10 時半前後から順次行われたこと，またスタジアムからの動線上に表彰台，国旗掲揚台，スクリーンが設置されていたこともあり，帰り際の選手，チーム関係者，観客，通行人の一部がそこに留まって表彰を楽しんでいた。今大会の組織委員会の方の話では，選手と関係者からは肯定的な意見をもらっているとのこと

イベントパークに設置された表彰用特設ステージ

であった。実際に表彰式をみていると，スタジアム式よりも距離が近いため選手の表情をはっきりと見ることができ，親しみやすさを感じた。選手もよりリラックスしていたようであった。プレゼンターにセバスチャン・コー氏（現ロンドン・オリンピック組織委員会会長）やセルゲイ・ブブカ氏（現 IOC 理事）が登場すると，大きな拍手が沸き起こった。

しかし，その場に立ち会う観客数で言うならば，

スタジアム式とは比較にならない。今回のイベントパーク式では数百人かせいぜい千人といったところだろう。また，表彰式というセレモニーが競技中にときどき挟まれることによって醸成される，ある種の緊張感とムードに思い入れがある私としては，寂しさも感じた。